

2017年12月24日 礼拝メッセージ

聖書：マタイの福音書 2章 13～23節

説教：泣き、叫ぶ者のために

はじめに

今日、四本目のろうそくに火が灯され、クリスマス礼拝を迎えております。さてクリスマスとは何か。新聞を見たらこんな記事が載っていました。あるお店で、「クリスマスの日はカップルの来店お断り」というビラを貼りだし、話題になったそうです。クリスマスは恋人と過ごさなければならぬとみんな思っている。でもひとりぼっちの人も沢山いるじゃないか。そんな人たちに寂しい思いをさせたくない。それでビラを貼ったのだそうです。世のなかでは、クリスマスを「愛を告白する日」のように考えている人もいます。

でも教会では、救い主であるイエス・キリストがお生まれになった日をクリスマスとしてお祝いする日と考えています。でもイエスという方は、私たちとどんな関係があるのか。多くの方はほとんど関係ないと思っている。でも結論から申上げます。クリスマスは、信じていようがいまいが私たち全員に関係がある。いったいどのような関係があるのか。そのことを考えていきます。

1 ユダヤ人の王として生まれた

1) 東方の博士たち

先週は、2章の1節から12節までを見ました。初めての方もいらっしゃるでしょうから、今日の箇所に入る前に、少しおさらいをします。

東方からやって来た博士たちが、エルサレムの町に来てこう叫びました。「ユダヤ人の

王としてお生まれになった方はどこにおられますか。私たちはその方の星を見たので、礼拝するために来ました。」

ユダヤ人の王とは、今日の主人公であり、またクリスマスにお生まれになったイエス・キリストのことです。博士たちは、天に現れた珍しい星を見て、わざわざ遠い旅をしてエルサレムの町にやってきました。ところが、どの町のどの家で生まれたのか、細かい所までは分からない。それでイスラエルで一番大きな町エルサレムを目指しました。そこには聖書の専門家が沢山いますから、その人たちに聞けばきっと何かが分かるに違いないと思ったわけです。

2) イスラエルの反応

さて、イスラエルの人たちは博士たちの叫ぶ声を聞いてどう反応したか。イスラエル人は旧約聖書を読んでいて、神がやがてイスラエルに救い主を送るというメッセージを聞いていました。その救い主というのは、ベツレヘムでユダヤ人の王として生まれることも知っていて、その救い主を何百年もずっと待ち望んでいました。そこへ博士たちがやってきて、「ユダヤ人の王がお生まれになった」と叫んだのですから、普通なら喜ぶはずでしょう。ところが実に冷淡です。完全に無視してしまいます。

ところが無視しない人がひとりいた。当時のイスラエルの王であったヘロデ大王です。彼はこのニュースを聞いて考えた。この子どもが大きくなったら、王の座を狙って自分を

殺しに来る。そういう不安に取りつかれます。そこで生まれたばかりの幼子を殺そうと企てる。でもイエスの居場所がわからない。そこでどうしたか。博士たちを泳がせる。「幼子はベツレヘムで生まれたからそこに行きなさい。そして、幼子の居場所がわかったら自分も行って拝むから教えてもらいたい。」巧みに誘い込んで、博士たちに探させるわけです。博士たちはその後ベツレヘムに向かい、そこで無事に幼子に会うことができました。ところが夢の中でヘロデのところに戻ってはいけなく警告されたので、別の道を通って自分の国に帰ってしまいます。

3) 暗殺計画

そこから今日の話がはじまります。16節。「その後、ヘロデは、博士たちにだまされたことがわかると、非常におこって、人をやって、ベツレヘムとその近辺の二歳以下の男の子をひとり残らず殺させた。その年齢は博士たちから突き止めておいた時間から割り出したのである。」

まさかそこまでするの、か、と思うかもしれませんが、ヘロデは非常に疑い深い性格で、自分の気に入らない者がいると、妻であろうが息子であろうが次々と殺したと言われます。ですからこのようなことも平気でやります。

2 さまよう幼子イエス

さあこれは大変です。幼子イエスはどうなったのか。そんなとき、父ヨセフはある夜夢を見ます。御使いは夢に現れ、「今すぐエジプトに逃げなさい」と語る。夢から覚めたヨセフは、すぐに旅支度をし、その夜エジプトに逃れて助かりました。

しかし素直に喜べません。この騒ぎに巻き

込まれて、ベツレヘム周辺の子どもたちが殺されてしまいます。17, 18 節にこうあります。「そのとき、預言者エレミヤを通して言われた事が成就した。『ラマで声がする。泣き、そして嘆き叫ぶ声。ラケルがその子らのために泣いている。ラケルは慰められることを拒んだ。子らがもういないからだ。』」

ラケルは、子どもを亡くした母親を象徴しています。紀元前600年頃に活躍した預言者エレミヤがこの事件のことをすでに語っていた。そうすると、神はずっと以前からこのような事件が起きることをご存じであった、ということになる。ご存じなら、どうして止めないのか。神はいったい何を考えているのか。そのことはまた後で見ましょう。

ヘロデが死ぬと、またヨセフの夢の中に御使いが現れ、今度はイスラエルに戻るようにと告げます。それで戻って見た。そうしたらベツレヘムに留まることが危険であることがわかってきた。どうしようかと迷っていたとき、また御使いが夢に現れ、ガリラヤ地方にあるナザレの村に向かうようにと告げられます。こうして見てくると、イエスは生まれた最初ときから、権力者に憎まれ、あちこちと逃げ回り、この世に自分の居場所がないような生活を強いられていました。

3 幼子はだれのところに来てくださったのか

1) ご自分の民は受け入れなかった

ヨハネの福音書1章11節にこうある。「この方はご自分のくににいられたのに、ご自分の民は受け入れなかった。」博士たちがエルサレムの町の中で「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか」と叫んだとき、だれも関心を寄せない。

いっぽう、ヘロデは草の根を分けてでも捜し出して殺すのだと躍起になった。

やがてイエスが大人になり、福音を宣べ伝えるようになると、今度は律法学者や祭司長と呼ばれる人たちがイエスをねたみ、なんとかイエスに恥をかかせて追い出そうとした。それができないとわかると、裁判にかけ、嘘の証言をさせ、民衆を扇動して十字架に追いやっていく。この方は生まれたときから死ぬまで、ご自分のくりに来られたのに、ご自分のくりになかに居場所がありませんでした。

2) 泣き、叫ぶ者の所へ

では、この方はいったいだれの所へ来られたのでしょうか。居場所がないのだから、だれのところにも来なかったということか。いいえ、そうではない。今日の箇所を見てください。二歳以下の子どもが殺されたとき、だれが泣いたか。だれが泣き叫んだか。母親たちです。その声はイエスの耳に届かなかったのか。いいえ。もちろん聞こえています。エレミヤの時代から、もう聞こえている。ご自分が生まれたことで、関係のない子どもたちが巻き添えになって死ぬ。これは都合のよい話でしょうか。普通なら都合の悪い話です。でも聖書にわざわざ書く。なぜ書くのか。イエスは泣き叫ぶ者の所へ来られた。そのことを示している。

この事件はすべてヘロデが計画したことです。ですから、すべての責任は彼にあります。悪いのは全部ヘロデだ。それで納得できるか。だれもが疑問に思うでしょう。もし、この方がベツレヘムでお生まれにならなかったなら、子どもたちは殺されずに済んだはずだ。博士たちがエルサレムに来なければこんなことは起きない。博士たちを導いたのは夜空

に輝く不思議な星でした。それができるのは神だけです。わざわざこのような事件が起きるようにお膳立て、舞台を提供しているようにさえ見えます。

以前、私たちの教会に中本亀子さんという方がおられました。12年前に89才で天に召されました。若いときにご主人の仕事の関係で満州に住んでおられたそうです。しかし敗戦となって、日本に引き揚げなければならなくなる。そのとき小さい男の子がおられたのですが、引き揚げるときの混乱のなかで、亡くなったそうです。当時そういうお子さんは沢山いた。また、連れて帰ることができずに中国に置いてきた子どもたちも沢山いた。どんな時代でも、母親の子を思う心は変わるはずはありません。中本姉も、お子さんを亡くされてかた六十年以上経っていましたが、悲しみを忘れることはありませんでした。

3) 「悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるから。」

「ラケルは慰められるのを拒んだ」とあります。あまりの悲しみに、だれも声をかけることができない。しかし主は声をかけられます。「悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるから。」といったどのようにして慰めることができるのでしょうか。単なる気休めですか。そんなはずはない。気休めではないとしたらどうするのか。方法は一つしかない。失った者を取り戻す。殺された子どもたちを母たちの手に取り戻す。死んだ者を生き返らせる。永遠のいのちを与える。イエスは罪から来る報酬である死から逃れられなくなっている者を救うために来られました。

でもいったいだれが救われるのか。品行方正、正しく、立派に生きている人が救われる

のか。能力があり、人々から尊敬され、素晴らしい業績を上げた人が救われるのか。

今日の所を読んでください。イエスは、子を失った母親のど真ん中に来ています。そうするとイエスはだれの所へ来られたのか。だれを救おうとしているのか。愛する者を失って悲しむ者たちの所へ来られました。だれかを傷つけ、苦しめてしまった。そんな思いの中で苦しむ者のところへ来られました。「おまえなどいない方がいい」と言われてさげすまれている、憎まれている者たちの所へ来られました。この世にあなたのいる場所はないと言われて、追い出されている人たちの所へ来ました。

ただ声をかけて励ますだけではない。あなたのためにわたしは十字架でいのちを捨てて、あなたを救い出す。あなたはそのとき、自分が生きていることを喜ぶことができ、ほかの人たちもあなたのいのちを喜ぶ。そのような場所にあなたを必ず導く。この方は神のひとり子でしたが、人となってくださって二千年前に罪の世に来てくださいました。

その主の御降誕をともに喜びたいと願います。